

今年九月、倫理運動は創始八十周年を迎えます。この間、四十五年にわたりトップの要職を務め、倫理研究所と倫理運動の礎を築いたのが丸山竹秋です。本稿では、その足跡の一端を紹介します。

倫理研究所の創設者である丸山敏雄が亡くなったのは、昭和二十六年十一月十四日、倫理運動の創始から六年後のことでした。その後を継いだのが、丸山敏雄の息子で、当時三十歳の丸山竹秋です。戦後、復員してから父の仕事を支えていました。

創始者を抜きにした倫理運動など誰も考えられなかった当時、若くして後任に就くことは、丸山竹秋にとってどれほどの重圧と困難だったでしょうか。その時の思いは、次のように述べられています。

至らざることは、百も承知である。しかし寸刻も躊躇すべきときではない。ここに至った以上は、生命をはめて、亡父の遺志を发扬させることだ――。

そうして断固たる第一歩をふみだしたのであります。（『岐路に立つ』九十五頁）丸山竹秋が成し遂げた業績の中でも特筆すべきものの一つが、『丸山敏雄全集』（以下、全集）の刊行です。他にも、富士高原研修所の建設や地球倫理の提唱などが挙げられます。

全集の第一回配本は昭和四十七年で、最後の巻が配本されたのは昭和五十六年でした。この十年がかりの大事業には、さらに多くの準備期間が必要でした。

丸山竹秋は同全集の付録、「全集刊行通



## 揺るぎない信念が 目標を達成し未来を拓く

信」で次のように述べています。準備の、そのまた準備期間とでもいうべきものに十五年。その後、資料の積極的収集と編纂とに数年間（これが実質的な準備期間にあたる）を要して、いよいよここに、倫理研究所創立二十五周年記念事業として、全二十九冊に及ぶ膨大な全集の刊行に踏み切ることになったのである。

丸山竹秋が『丸山敏雄全集』の刊行を決意したのは、創始者が逝去した直後のことでした。「なんと永い歳月であったろうか。実は、全集の刊行を私がひそかに決意したのは、先生の葬儀が神田の共立講堂でおこなわれた昭和二十六年の暮のことであった」と振り返っています。

口で説くだけでは消え去ってしまうけれども、文字に記せば永遠に残る。それは人類の幸福を築く上で、大きな基盤となるに違いない――。衰えていく身体を奮い立たせて筆をとり続けた創始者に直に接していた丸山竹秋は、それを自身の使命と心得て、倫理運動全体の舵取りをしつつ、静かに準備を進め、機が熟すのを待ち、やがて成し遂げたのでした。

その歩みは、『万人幸福の葉』第十五条（信成万事）にある「きつと出来るぞ、きつとやるぞと、動かぬ信念がその事を成就させる」という言葉通りの「実践の軌跡」だったのではないのでしょうか。

「人生は信念によって成る」のです。